

序

先ごろ、イラクの首都バグダッドへ行った。

今そこで、当社は東南アジアからの数千人の労働者の協力によって、大きな住宅団地やその他の建設を進めている。当社のほかにも、ヨーロッパ各国からきた企業が、町のあちこちで建設を行なっているのが見られる。古い都バグダッドの新しい壮大な都市造りである。

1日、バグダッドの南方約90キロにあるバビロンの遺跡を訪れた。バビロンというのはアッカド語で神の門という意味だそうであるが、古代バビロニアの中心である。バビロニアは、BC1830年頃生れた第一王朝と、BC625年に生れた新バビロニアとあるが、とくにあとの新バビロニア時代に巨大な都市造りが行なわれた。19世紀以来その遺跡の発掘が進められ、今それを目のあたり見ることができる。

バビロンから車で20分ばかりの所にキシユの遺跡がある。これは5千年ばかり前のものというからシュメール時代のものである。こういうものを見てみると、自然に歴史というものを感じず。そうすると今バグダッドで行なわれている建設も歴史の一環であり、われわれは、この国の歴史に参加しているのだと思うのである。

だとするならば、われわれが日本で行なっていることは日本の歴史への参加であると改めて考えるわけである。自分の行なっていることを歴史への参加として眺めることによって、具体的に何がどう変わるかとなると、なかなかいいにくいことであるが、しかし心構えは変わるように思う。

まず、長い歴史の流れの中で自分の仕事をとらえるようになる。雑多な、泡のような情報の中から本当のものをつかまえようとするだろう。そしてそのときの基本的目標は、将来の人類の幸福ということであろう。TQCでマーケットインということがいわれるが、この場合のマーケットは未来の人類である。

そうすれば、責任感と奉仕の心が生まれ、それによってまた勇気と誇りを持つことができよう。

このような心構えはすべて、研究に従事する者にとって、もっとも必要なことである。

1982年4月

清水建設株式会社研究所長

工学博士 鳥田 専 右